

剣闘士闘技 (*munera gladiatoria*) 研究百年史

— 政治・文化史から社会・心性史へ —

梶 田 知 志

はじめに

剣闘士闘技 *munus gladiatorium* とは、特別な場所（公共広場に設けられた特設会場、のちに円形闘技場）で行なわれる武装した一対の剣闘士 *gladiator* による闘いである。古代ローマにおいて、同闘技（見世物）は約700年にわたって行なわれ、ローマ市民たちに広く愛好されていた。

また、その特性（過激さ、残酷さ）が、時に嫌悪感と好奇心の入り交じった複雑な感情を抱かせるものでありながら、同闘技は、後代の人々にも高い関心を引き起こし続け、古代史研究者たちにも近代歴史学の興った19世紀以前から注目されてきた⁽¹⁾。一方、国内では関連する文献がいくつか存在するものの⁽²⁾、同闘技自体をテーマの中心に据えた研究が行われたことはほぼ皆無といった状態である。ゆえに、剣闘士闘技研究の流れが邦文で紹介されることも必然的になかった。

本稿では、このような国内の研究状況を鑑み、これまでの同闘技の研究の歩みを振り返るとともに、同闘技の今後の展望について筆者の見解を交えながら述べたいと思う。なお、紙幅の都合により、同闘技に関連する全ての研究を網羅的に扱うのは不可能なため、研究の各発展段階を象徴するような文献のみを取り上げざるを得なかったことをあらかじめ述べておく。

I. 古典学説の形成

剣闘士闘技の研究において、まずその先駆者に位置づけられるのは、フリードレンダーであろう⁽³⁾。彼の一連の論考に見られる姿勢は、剣闘士闘技の孕む様々な問題を、あらためて原史料に立ち返り網羅的に論じるというものである。その構成は、同闘技の略史、関連する施設、剣闘士たちとその徵募方法、商取引、育成制度、闘技の具体的進行等からなっている。このようなスタイルは、同時代のラフェイユやシュナイダーにも共通している⁽⁴⁾。

また、フリードレンダーの編書（注3掲載書）の増補版では、ドレクセルが、円形闘技場 *amphitheatrum* の研究を著した⁽⁵⁾。彼は、広大な帝国の領土にかつて存在していた円形闘技場を、碑文を中心とする史料や他の研究者の報告に基づいて一覧にまとめ、現存している71カ所については、各部の大きさを図表化・比較している。他に、マイヤーの博士論文、モムゼンの同闘

技に関連する碑文及びローマ法についての諸論考、ポンペイの剣闘士闘技関連施設をめぐるソリアノやマウの考古学的研究も発表された⁽⁶⁾。

このように、19世紀末から20世紀の初めにかけて、今日の研究の礎となる数多くの業績が生み出され、剣闘士闘技の全体的な歴史観、いわば「古典学説」と呼びうるものが形成されたのである。

II. 隣接諸学からのアプローチ

20世紀も半ばにさしかかると、こうした「古典学説」に修正を加える動きが、歴史学ではなく碑文学の分野で起こった。1940年、フランスの碩学ロベールが、東方ギリシア語圏における剣闘士闘技及び猛獣狩り *venatio* に関連した碑文の集成を発表した⁽⁷⁾。古くから研究者の間では、剣闘士闘技から「ギリシア」を過度に切り離す傾向があったが⁽⁸⁾、彼の集成した約300点に上るギリシア語碑文とその分析は、ギリシア語地域における剣闘士闘技受容の実態を明らかにした⁽⁹⁾。

また、これら一連の歴史学及び碑文学の動向の背景で、考古学的な調査と研究も行なわれ、特に1937年のルドゥス・マグヌス *Ludus Magnus*⁽¹⁰⁾ の発掘調査及び出土品の研究は、同闘技の研究に大きな影響を与えた。だが、間もなく勃発した第二次大戦の影響により発掘作業・研究は中断を余儀なくされ、こういった動きが学術的成果として結実するに至ったのは50年代末以降であった。そして、この時点の考古学的研究及びそれ以前のルドゥス・マグヌスに関連する研究は、コリーニとコッツァの著書によってまとめられた⁽¹¹⁾。

III. G・ヴィルと剣闘士闘技研究

60年代に入り、同闘技の研究において後代に最も多大な影響を及ぼしたヴィルの論考が発表され始めた⁽¹²⁾。彼は、アナール学派の大家ヴェーヌ P. Veyne と共に同学派の第3世代に位置付けられ、同闘技の問題に継続的に取り組んだ数少ない研究者である。また、彼の発表した論考には、同学派ならではの社会史的視点と取組みが貫かれている。

彼は1967年に事故により急逝したため、存命中に公刊された作品は少ないが、彼の死後、先に挙げたヴェーヌなどのフランス学院のかつての同僚が、残された彼の原稿を編集し公刊し⁽¹³⁾、特に1981年に公刊されたモノグラフ⁽¹⁴⁾は、後の剣闘士闘技研究の方向性を決定付けるものとなった。この論考において、彼は19世紀末から20世紀初頭にかけて形成され、ほとんど無批判に受け入れられてきた古典学説に対して多くの反論を展開している。

事実上、この論考は60年代に執筆されたものであるが、そこに見受けられる先見性や批判的姿勢は、時代をほとんど感じさせないように思われる。というのも、同年代、あるいはそれ以降の年代における同闘技に関する多くの研究ですら、未だ古典学説に安易に依拠していたからである。また、今日、その関連史料・文献の分析の徹底性と鋭さから、彼の残した業績を無視して同

闘技の研究を行うことは、事実上不可能だと言えよう⁽¹⁵⁾。

IV. 停滞と社会史への展開

60年代の後半には、グラントの概説的な著作が公刊された⁽¹⁶⁾。これはオーゲの著書⁽¹⁷⁾と並んで広く普及した啓蒙書であるが、後にイギリスの研究者ウィードマンが、これらの著書を批判している。彼曰く、これらの著者は剣闘士闘技というローマ文化の重要な側面への共感が欠如しているために、「身動きがとれなくなっている (*hampered*)」という⁽¹⁸⁾。この評価の可否は別として、両著に共通している問題意識は、後のヨーロッパ文明の礎となった「優れた」ローマ文明とそれが内包する忌むべき残酷な慣習である剣闘士闘技との対立をいかにして説明するかということだと思われる。グラントは、同闘技に何ら前向きな側面を見い出さず、帝国内におけるキリスト教普及への道程を造り出す要因となった点で評価しているのみである⁽¹⁹⁾。

一方、オーゲは、剣闘士闘技という文化的表象に対する不可解さを表明しつつも、それが孕む諸相について比較的詳細に取り扱っている。また、彼は同闘技を取り巻く社会の意識やその変化に着目することも忘れていない。この点から言えば、ここに社会史的視点の萌芽を見ることができると思われるが、彼は帝政期以降の伝統的な「パンとサーカス (*panem et circenses*)⁽²⁰⁾」観も保持し続けている。より具体的に言えば、支配者と群衆という二極構造における同闘技の「儀式」から「見世物」への変質が、ローマの政治体制の変化と一致しているという見方である⁽²¹⁾。しかし、共和政期の闘技が、一般に故人の追悼として行なわれていたことは事実だが⁽²²⁾、帝政期においても近親の死と関連づけて行なわれた例が見られるので⁽²³⁾、のちの時代においても同闘技の宗教的な意味合いはわずかではあるが残存していたと言えよう。

また、彼は、この古代ローマの風刺家ユウェナリス D. Iunius Iuvenalis の有名な一節を帝政期の政治・社会の象徴として持ち出す一方で、前2世紀末においてすでに同闘技にそのような変質（「世俗化 (*secularization*)」）があったと述べている⁽²⁴⁾。さらに帝政期におけるパンとサーカス状況の端緒をユリウス・カエサルによる剣闘士闘技開催に見出しつつ⁽²⁵⁾、彼の後継者たる皇帝たちが同闘技の開催を政治の道具として利用し続けることも述べている⁽²⁶⁾。こうなると、共和政期・帝政期問わず、同闘技が政治的プロパガンダの道具として時の有力者に共通して利用されているという事実は、彼も認めていることになる。

結局のところ、同闘技の性質に関して、典型的なパンとサーカス観が示すほど、二つの政治体制の間に明確な対照を見い出すことは不可能であろう。

V. 社会史的視点の本格的導入

70年代以降、剣闘士闘技を含む見世物の研究は、社会史の一分野として捉えられることが多くなった。それは、その研究を進める際に、当時の古代史研究者たちが、従来の文献学的手法に限

界を感じ始めていたことに起因していると思われる。恐らく、この時期に古典古代の「見世物（開催）」という現象の研究上、その個別の実態やそれを取り巻く社会の意識などのより深い理解が、従来の手法におけるそれらの理念化、象徴化（あるいは単純化）よりも重要性を与えられるようになったのであろう。そこでヴェーヌのような研究者たちは、そういった問題を取り扱いやすい社会学や文化人類学といった20世紀の後半に急激な進歩を遂げた学問の新手法を取り入れようとしたのだと思われる⁽²⁷⁾。

とはいえ、このような試みが剣闘士闘技の研究において定着するのは80年代からで、ホプキンスの1983年の著作⁽²⁸⁾にそれを垣間見ることができる。しかし、同著における剣闘士闘技に関する部分は、もっぱら古典テキストの参照及び引用に依拠して構成されており、手法的には従来の歴史学のそれと大きく異なる要素は見当たらない⁽²⁹⁾。ただ唯一の相違点は、剣闘士闘技という事象を通じて古代ローマ人の感情や認識、あるいは彼らの体験や表現法をより深く考察しようとする姿勢であろう⁽³⁰⁾。そして、以降の研究では、こういった心性史的考察がむしろ主流となっていくのである。

VI. 隣接諸学における二つの集成

この時期には、歴史学研究におけるこのような展開と平行して、剣闘士闘技研究は碑文学、考古学の分野でも進展が見られた。まず、碑文学の分野では、サッパティーニ・トゥモレーシが約25年間に渡って数々の業績を残した⁽³¹⁾。特に1988年に始められた碑文集成のシリーズ⁽³²⁾は、不定期ながら現在も刊行され続けており、今後さらなる重要性を帯びてくることになるだろう。

考古学の分野では、ゴルヴァンの円形闘技場に関する大著⁽³³⁾が発表された。そこでは、かつての帝国領域内に現存しているものあるいは史料上確認できるものが網羅的に取り扱われている。円形闘技場に関する論考については、すでにドレクセル（注5掲載書）を挙げたが、同著には20世紀後半の考古学的調査の成果によって、それとは比較にならないほどの豊かな情報が含まれている。さらに、とりわけ現存しているものに関しては、それらの建築構造を詳細に分析し、ドレクセルのような単純な地理的分類のみならず、歴史的コンテキストないしは構造上の特徴に基づいた年代的なカタログ化・考察をも試みている。ゆえに、ここに集積された膨大な情報は、以降の剣闘士闘技及び猛獣狩りの研究において、まず参照すべき基本文献の一つとなっているといえよう。

VII. 「G・ウィル以後」の社会・心性史的研究

90年代から現在にかけて、剣闘士闘技関連の論考・及び著書が多く発表されている。このことは様々なレベルにおいて、同事象に対する関心度の相対的な高さを示していると思われるが、一方でウィルによる1981年のモノグラフ（注14掲載書）の発表が一つの要因となっていることは否

定できないであろう。

この時期における主なものとして、まず、ウィードマンによる著書⁽³⁴⁾を挙げなければならない。この書における主題は、剣闘士闘技及び猛獣狩りという見世物をローマ人のアイデンティティとの関連で論じることである。その過程で、彼は剣闘士たちが闘いを繰り広げるアリーナに、「文明と野蛮」「ローマ的なものと非ローマ的なもの」「(社会的な) 生と死」など相対する二つの概念の交錯する識別的な性質を見出そうと試みている⁽³⁵⁾。この視点は、明らかに70年代後半以降勢いを増してきた社会・心性史的な流れを汲むものであろう。また、彼は同事象の孕む問題も網羅的ではないにしろ幅広く取り扱っており、それと関連づけて従来の同事象の研究における人道主義的な偏見や史料解釈を徹底的に批判している⁽³⁶⁾。

次に、より社会・心性史的なアプローチを実践しているバートンの著書⁽³⁷⁾が挙げられる。この中で、彼女は主に後1世紀の古代ローマ人が感情の極限におかれた際の彼らの心性、あるいはその表現形式について探ろうと試みている。そして、彼女はその典型として剣闘士を取り上げ、それらを分析するために古典テキストを引用しつつ、社会学や心理学等他の学問分野の手法や知見をも取り入れている。実際に、プラスやカイルの研究⁽³⁸⁾において、それぞれ主題は異なるものの、同様の意識が認められよう。

XI. 研究史のまとめと残された課題

以上、今日までの剣闘士闘技に関連する約100年に及ぶ研究の歩みを概観してきた。その歩みをここで改めて歴史学を軸に述べるならば、19世紀後半のドイツ人研究者たちに始まり、隣接諸学の専門的発展を滋養としてアナル学派のヴィルに結実し、ウィードマンあるいはバートンによる社会・心性史的研究に至ったとすることができるだろう。

また、この研究の発展過程には、3つの特徴が見出される。第一に、歴史学と隣接諸学の盛んな相互利用の見られる点である。この傾向は、19世紀後半における初期の研究からすでに見られるものだが、その大きな要因の一つとして、剣闘士闘技に関連する事象が、古典文献のみでは十分な情報を得られないことが挙げられる。実際、古典文献で得られる剣闘士闘技関連の情報は散発的で非常に限定的である。そういった情報の空白を補完するものとして、必然的に古代の遺物の利用が行なわれたのではないだろうか。第二に、個別事象の解釈の相違を別として、研究者の視点の変化が、研究史上大きな意味を持っているという点である。当初、古代ローマにおける剣闘士闘技を含む見世物という事象は、政治・文化史上の主題であった。だが、すでに述べたような70年代後半の変化により、現在では社会・心性史の一分野として研究が行なわれている。第三に、同闘技の研究は、「大局観」から批判・修正過程としての「専門的細分化」、そしてまた「大局観」へと至るサイクルがその発展の根幹に常にあったという点である。19世紀後半以降の古典学説形成に寄与した研究者たちは、いずれも古代ローマ史学史にその名を残す碩学たちであった。

彼らは、自らの膨大な古典古代の知識と類い稀な分析能力・思考を武器に、今日でもなお完全には克服しきれない綿密かつ網羅的な「大局観」を生みだした。しかし、その後現れる隣接諸学の専門的細分化の波に晒されると、彼らの「大局観」は綻びを見せざるを得なかった。さらに、そうした批判・修正の波が過ぎ去ると、再び新しい「大局観」がそこに残ったのである。

さて、最後に、同闘技の研究の残された課題について考えてみようと思う。まず、現在の同闘技の研究の動向を見てみると、少なくとも歴史学の分野においては、ウィードマンやバートンの業績を凌ぐほどの影響力を持つ動きは確認できない。だが、隣接諸学においては新しい動向が散見される。例えば、考古学の分野で言えば、ラ・レジーナの展示会図版カタログ付論文集⁽³⁹⁾、ボムガードナーの円形闘技場に関する著書⁽⁴⁰⁾、オーストリア考古学研究所、ウィーン大学組織学・発生学研究所及びトルコ共和国文化庁共同企画のセルジューク・エベソス博物館展示会図版カタログ付論文集⁽⁴¹⁾が挙げられよう。中でも最後のものに関しては、発掘された剣闘士の遺骨の骨学・解剖学的分析によって、これまで文字による情報か壁画等の図像でしかなかった「剣闘士の死」が、今までにないほどより現実味を帯びた生々しいものとなっている。また、碑文学では、ホープの剣闘士の墓碑銘に関する研究が挙げらる⁽⁴²⁾。その研究は、剣闘士の墓碑銘の分析を通じて、彼らのアイデンティティや社会的境遇の解明を試みるというものである。

ここで、先ほど三つ目にあげた研究史上の特徴を踏まえ、現在剣闘士闘技の研究はどのサイクルにあるのかと問うならば、明らかに「専門的細分化」の時期にあると言っていいただろう。つまり、70年代後半以降、社会・心性史的研究の目指してきたアリーナとその周辺の考察による古代ローマ人の心性の解明は、ウィードマンやバートンの研究で当面の終着点を迎えている一方で、隣接諸学における一連の動向から、剣闘士闘技に関連する諸事象の専門的な研究が進んでいるということである。

では、現在考えうる同闘技研究の課題とは何だろうか。あくまで個人的な見解だが、これまでの歴史学研究において、決定的に欠如しているものがある。それは、闘技で激しい闘いを繰り広げる剣闘士の視点（心性）である。例えば、ウィードマンは、すでに少し触れたようにアリーナに二つの異なる視点の対立を見出しているが、そこには基本的に主催者と観衆しか登場しない。このことは、少なくとも本稿で振り返った数々の研究にも例外なく当てはまることである。これは、決して研究者たちの「怠慢」によるものではない。アリーナを通して「古代ローマ人」の心性を探るという目的がある限り、古代ローマ社会の底辺、あるいはその埒外にある剣闘士の視点は無視されざるをえないのである。だが、それは彼らの視点を無視すべきであるということも、またそのような視点がなかったということも意味しないだろう。剣闘士たちは、一部のローマ市民のように、我々後代の者に対して何ら直接意思を表現する手段も権利も持たなかったが、先に挙げたホープはすでに剣闘士側の唯一の史料と言える墓碑銘の分析に着手している。また、ロベールの碑文研究がまだ殆ど批判を経っていないことや、サッパティーニ・トゥモレーシの碑文集成シ

リーズが未完という状況も考慮すれば、今後の進展は期待できるだろう。とはいえ、このまま碑文学あるいは考古学の研究が進んでも、彼らの視点を採る術は限られるため、恐らくこの「課題」の克服は困難を極めるだろうが、彼らの視点が明らかになれば同闘技研究の新しい局面を見出すことも可能かもしれない。

註

- (1) Cf. Lipsius, I., 'Saturnalia sermonum libri duo de gladiatoribus' in *Thesaurus Antiquitatum Romanarum congestus* a J. G. Glavio, vol.IX, Venetiis 1735, pp.1165-1333; Henzen, W., *Explicatio musivi in villa Burghesiana asservati, quo certamina amphitheatri repraesentata exstant*, Romae 1845, etc.
- (2) まず、土井正興『スパルタクス反乱論序説』(法政大学出版局、1977年)が挙げられる。この書は、剣闘士闘技自体の問題を取り扱うものではなく、むしろ古代ローマ帝国の支配の背景にある性質(精神性)ないし奴隷反乱が起こった政治的・社会的コンテクスト(主に奴隷制)を考察し、それらの歴史的意義を改めて問うものである。他に、同『スパルタクスの蜂起』(青木書店、1979年)、島田誠『コロッセウムから読むローマ帝国』(講談社新書メチエ、1999年)、本村凌二「パンとサーカス ―地中海都市における民衆文化のひとつの原像として」(『地中海学研究』9、1986年、7-14頁)、同「剣闘士とエロティシズム」(小林康夫・船曳建夫編『知の論理』、東京大学出版会、1995年、184-198頁)、同『ポンペイ・グラフィティ』(中公新書、1996年)等がある。また、最近では藤澤明寛「ローマ帝政初期の地方都市におけるムネラの負担」(『史観』149、2003年、49-63頁)においても剣闘士闘技について触れられている。
- (3) Friedländer, L. (ed.), *Darstellungen aus der Sittengeschichte Roms*, II, Leipzig 1861-; Id., 'Die amphitheatralischen Spiele', in Marquart, J. (ed.), *Römischen Staatsverwaltung*, III², pp.554-565 vom Id., Mommsen, Th. (eds.), *Handbuch der römischen Alterthümer*, VI², Leipzig 1885.
- (4) Lafaye, G., 'GLADIATOR' in *Dar.-Sag.* vol.II-2, Paris 1896, pp.1563-99; Schneider, K., 'Gladiatores' in *RE* suppl.III, Stuttgart 1918, coll.760-84.
- (5) Drexel, F., 'Über Gebäude für die öffentlichen Schauspiele in Italien und den Provinzen. A. Amphitheater' in Friedländer, L., *op.cit.* IV⁹⁻¹⁰, Leipzig 1921, pp.205-240. しかし、この論考はフリードレンダーが旧版第2巻において執筆した補遺を、ドレクセルが再編集、加筆したものである。また、剣闘士の衣装や武装に関する補遺も同巻に収められている('Kostüm und Bewaffnung der Gladiatoren', *Ibid.*, pp.258-267)。
- (6) Meier, P. J., *De gladiatura Romana: quaestiones selectae*, Bonn 1881; Mommsen, Th., 'Die Gladiatorentessen', *Hermes* 21 (1886), pp.266-276; Sogliano, A., 'V. Pompei-Relazione degli scavi fatti nel mese di giugno 1899', *NSA* 1899, pp.228-35, pp.339-58; Id., 'Il primitivo ludo gladiatorio', *RAL* 30 (1921), pp.17-29; Mau, A., Ausgrabungen von Pompeji, *MKDAI (R)* 16 (1901), pp.283-365; Id., 'Die Gladiatorenkaserne (ludus gladiatorius)' in Overbeck, J. (ed.), *Pompeji in Seinen Gebäude, Alterthümern und Kunstwerken*, Roma 1968 (repr.), pp.193-8. なお、モムゼンは、他にも *Ephemeris Epigraphica (Corpus Inscriptionum Latinarum supplementum)* 等で剣闘士闘技に関連する問題を個別的に論じている。
- (7) Robert, L., *Les gladiateurs dans l'Orient grec*, Paris 1940. また、彼はこの後にも同事象に関連する論考を残している。Cf. Id., 'Quelques monuments de gladiateurs dans l'Orient grec', *Hellenica* III (1946), pp.112-50, pp.151-62; *Ibid.*V (1948), pp.75-128; *Ibid.*VII (1949), pp.126-50; *Ibid.*VIII (1950), pp.39-72.

- (8) こういった傾向の典型的な例として次のものが挙げられる。Cf. Lafaye *op.cit.* p.1565 (r.col.) f. また、同じギリシア語圏であっても、バルカン半島及び周辺諸島よりも小アジアやエジプトにおいて闘技が活況を呈していたという前提に立ち、この要因を「残酷な」東洋人の性質に帰する傾向があった。Cf. *Ibid.*, p.1566 (l.col.) f.; Friedländer, *op.cit.* II⁹ (1920), p.106. しかし、こういった相違は住民の性質というよりは経済的な格差に由来すると今日指摘されている (Cf. Weismann, W., 'Gladiator' in *RAC* XI, 1981, col.36f.)。また、実際に彼らが前提としている東方における剣闘士闘技の在り方も、地域によって異なるようである。例えば、彼らはエジプトにおいて剣闘士闘技が盛んであったかのように述べているが、当該地域から発見された同闘技に関連するテキスト (碑文及びパピルス文書) は極めて少ない (Cf. Robert 1940, p.242ff.)。純粋に関連史料の数が闘技の浸透度のパラメータとなるわけではないが、ことエジプトに関しては、ヘレニズム時代以来繁栄をしていたアレクサンドリア以外で闘技が行なわれていた形跡はない。
- (9) Robert, *op.cit.* (1940), p.239ff.
- (10) 都市ローマの第三地区にある、皇帝ドミティアヌス (T. Flavius Domitianus, 位81-96年) によって建設された古代ローマ史上最大規模の剣闘士養成所のこと。なお、その遺跡は今日も北側半分のみ見ることができる。Cf. *LTUR* III, s. v. 'Ludus Magnus', pp.196-7; Claridge, A., *Rome (OAG)* Oxford 1998, p.283ff.
- (11) Cf. Colini, A. M., Cozza, L. (eds.), *Ludus Magnus*, Roma 1962.
- (12) Ville, G., 'Les jeux de gladiateurs dans l'empire chrétien', *Mélanges d'archéologie et d'histoire* 72 (1960), pp.314-6; Id., 'Les Oxfordes de Trimalcion figurantes gladiateurs et une serie de verres sigilles gaulois', *Hommages à Jean Bayet* (Collection Latomus), 1964, pp.722-33; Id., 'Essai de datation de la mosaïque gréco-romaine', *Actes du Colloque du CNRS* (1965), Paris, pp.147-55; Id., 'Le guerre et le munus' in Brisson, J.-P., *Problèmes de la guerre à Rome*, Paris 1969, pp.185-95.
- (13) Id., 'Religion et politique: comment ont pris fin les combats de gladiateurs', *Annales E. S. C.* 34 (1979), pp.651-71.
- (14) Id., *La gladiature en Occident des origines à la mort de Domitien*, Rome 1981.
- (15) ただし、その影響力の強さから別の副作用、すなわち彼を過大に権威化して、無批判にその学説を受け入れてしまう傾向が見られるのも事実である。例えば、Potter, D. S., 'Entertainers in the Roman Empire' in Id., Mattingly, D. J. (eds.), *Life, Death, and Entertainment in the Roman Empire*, Michigan 1999, p.256ff. に、それが顕著に見られる。
- (16) Grant, M., *Gladiators*, Harmondsworth 1967.
- (17) Auguet, R., *Cruauté et civilisation: les jeux romains*, Paris 1970 (Eng. transl. *Cruelty and Civilisation: the Roman Games*, Georg Allen & Unwin Ltd 1972- (Routledge 1994-).
- (18) Wiedemann 1995 (註34掲載書), xvi. この表現は誤解を招くと思われるので補足するが、彼は近代以降の研究者が認める同闘技の残酷さを否定しているわけではなく、むしろそのような「周知のこと」を近代的な視点で強調する姿勢、さらにそこに潜在する偏向的な古典古代観を批判しているのである。
- (19) Grant, *op.cit.*, p.11f., p.113ff. しかし、こうした論理は、例えば西ローマ皇帝ホノリウス (Flavius Honorius Augustus, 位395-423年) による剣闘士闘技廃止の顛末を描いた、ギボンのいわゆる「テレマクス事件」(404年) と共通した意識を感じざるを得ない (E・ギボン／朱牟田夏雄訳『ローマ帝国衰亡史』第5巻、1987年、66-7頁参照)。もっと言えば、反キリスト教的な剣闘士闘技をも古代ローマ帝国における同教の勝利に結びつけようとする教会史観に相通するものが両者から感じられるということである。ちなみに、ギボンの当該箇所の記事の原史料は、キュッルス Cyrrhus 司教テオドレトス (Theodoretos, 393-466年) の『教会史』である (Theodoret. *Hist Eccl.* 5.26)。
- (20) Juv. 10. (78-)81.
- (21) Auguet, *op.cit.* (Eng. transl., Routledge 1994-), p.184, 1.16ff.

- (22) Cf. Liv. 23.30.15, 31.50.4, 39.46.2f., 41.28.11; Ville 1981, p.42ff.
- (23) Plin. *Ep.* 6.34.
- (24) Auguet, *op.cit.*, p.23ff. しかし、前2世紀末以前の剣闘士闘技が、純粹に宗教的なものであり、非政治的なものであったと主張するのは困難であろう。社会的エリートの葬儀が、故人の生前の名声を人々に呼び起こすと同時にその人物の子孫の後継を高らかに周囲に喧伝する場であり、その一部をなす剣闘士闘技開催が必然的に政治色を帯びるのは明白だからである。Cf. Wiedemann 1995 (註34掲載書), p.5, 1.13ff.
- (25) *Ibid.*, p.25ff.
- (26) *Ibid.*, p.28ff.
- (27) Cf. Veyne, P., *Le pain et le cirque: sociologie historique d'un pluralisme politique*, Paris 1976, p.9ff.
- (28) Hopkins, K., *Death and Renewal*, Cambridge 1983.
- (29) この著書の主題は、むしろ政治的エリート層の権力と富の移行を取り扱った第2～3章であり、社会学的あるいは文化人類学的手法の導入は主にそこで行なわれている。ちなみに、この著書の邦訳では剣闘士闘技及びローマ人の葬礼を扱った第1章と第4章のみが収録されている(高木正朗/永都軍三共訳『古代ローマ人と死』、晃洋書房、1996年)。
- (30) Hopkins, *op.cit.*, xiv ff.
- (31) Sabbatini Tumolesi, P., *Gladiatorum paria. Annunci di spettacoli gladiatorii a Pompei*, Roma 1980. ただし、彼女の剣闘士闘技関連の論文及び著書は70年代からすでに継続的に発表されており、その数も多い(業績リストは、注32掲載書第4巻、pp.10-11に掲載)。
- (32) Id., *Epigrafia anfiteatrale dell'occidente romano I*. Roma, Roma 1988; Gregori, G., *Ibid.* II. *Regiones Italiae VI-XI*, Roma 1989; Buonocore, M., *Ibid.* III. *Regiones II-V, Sicilia, Sardinia e Corsica*, Roma 1992; Fora, M., *Ibid.* IV. *Regio Italiae I: Latium*, Roma 1996; Letizia Caldelli, M., Vismara, C., *Ibid.* V. *Alpes Maritimae, Gallia Narbonensis, Tres Galliae, Germaniae, Britannia*, Roma 2000; Orlandi, S., *Ibid.* VI. *Roma. Anfiteatri e strutture annesses con una nuova edizione e commento delle iscrizioni del Colosseo*, Roma 2004.
- (33) Golvin, J. C., *L'amphitheatre romain* (2 voll.), Paris 1988. Cf. Id., Landes, C., *Amphitheatres et gladiateurs*, Paris 1990.
- (34) Wiedemann, Th., *Emperors and Gladiators*, Routledge 1992 (1995-, repr. in pap. back).
- (35) *Ibid.*, pp.41-2; pp.46-7; pp.154-55.
- (36) *Ibid.*, xvi; p.128ff. *passim*.
- (37) Barton, C. A., *The Sorrows of the Ancient Romans*, Princeton 1993.
- (38) Plass, P., *The Games of Death in Ancient Rome*, Wisconsin 1995; Kyle, D. G., *Spectacles of Death in Ancient Rome*, Routledge 2001. また、カイルは同著において近年の心性史的な研究の動向について詳細に論じている (*Ibid.*, pp.7-20)。
- (39) La Regina, A. (ed.), *Sangue e Arena*, Electa/Roma 2001.
- (40) Grossschmidt, K., Kanz, F. (eds.), *Gladiatoren in Ephesos: Tod am Nachmittag.*, Wien 2002.
- (41) Bomgardner, D. M., *The Story of the Roman Amphitheater*, Routledge 2000.
- (42) Hope, V. M., 'Negotiating Identity: The Gladiators of Roman Nimes' in Berry, J., Laurence, R. (eds.), *Cultural Identity in the Roman Empire*, London 1998, pp.176-95; Id., 'Fighting for Identity: The Funerary Commemoration of Italian Gladiators' in Cooley, A. (ed.), *The Epigraphic Landscape of Roman Italy*, London 2000, pp.93-113.